

島原大変肥後迷惑

有明海沿岸で1万5000人が犠牲



島原大変肥後図(肥前島原松平文庫所蔵)

寛政4(1792)年4月1日の夜、雲仙岳の眉山の南側が崩壊して大量の土砂が有明海に流れ込んだ。その衝撃で津波が発生し、島原藩と対岸の熊本藩、天草に大きな被害をもたらした。島原半島側では土砂崩れと津波で約1万人、肥後・天草側では津波で約5000人が犠牲になったと伝えられている。このため、この災害は「島原大変肥後迷惑」といわれる。

津波

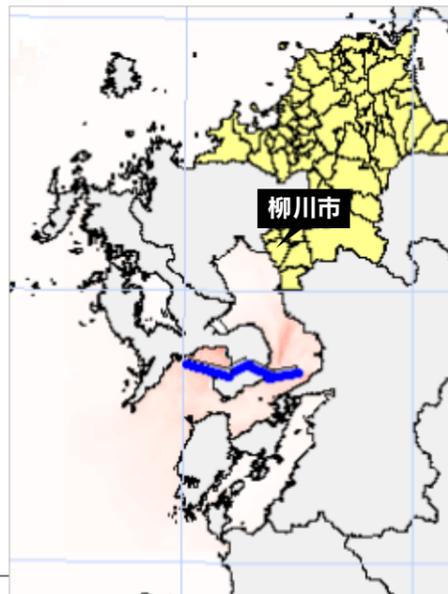
歴史に学び 未来を予見する

島原大変肥後迷惑での柳川藩の津波被害は
昨年3月11日に発生した東日本大震災では、想定を超える大津波が押し寄せ、多くの人が犠牲になりました。テレビの画面に映し出される建物や自動車押し流される光景を、私たちはほろろと見守るしかありませんでした。「柳川でも津波災害は起きるのか」。自然の猛威を見せつけられ、被災地から遠く離れた本市でも、津波に対する関心が高まりました。
自然災害の発生を予測することは困難です。しかし、歴史をさかのぼること、過去に起きた災害のことを知ることが出来ます。柳川古文書館の協力で柳川の津波の記録をたどってみました。結論からいえば、柳川が津波で大きな被害を受けた記録はありません。

寛政4(1792)年4月1日に雲仙岳の眉山が崩壊して起きた津波が、唯一の記録として残っています。
その記録を残したのは、柳川藩の家老戸次織衛です。織衛はこの日の様子を日記に書きとめています。内容を要約すると、「この日の午後10時ごろ、沖端川の水位が高くなり、土居も危うくなったが、その後、次第に水位は下がったことを、午前0時ごろに町役2人が報告に来た」とあります。
また、4月5日に織衛が書いた、江戸の叔父にあてた手紙の下書きにも、「こちらは肥前と肥後に接し、領内に沿岸部もあるが、このときは何の異常もなく、たいへん幸いなことだった」とあります。これらのことを考え合わせると、このときは大きな被害を受けなかったと考えていいようです。

県シミュレーションでの津波による被害予測

県は東日本大震災を受け、地域防災計画の見直しに着手しています。それに伴い「福岡県防災会議地震・津波部門専門委員会」を立ち上げ、今後発生するおそれのある津波災害についても検討を加えています。その中で本市に影響があると想定しているのが、島原半島を中心に東西に延びる、雲仙地溝南縁東部断層帯と西部断層帯が連動して起きる地震に伴う津波です。
県のシミュレーションは、この断層



でマグニチュード7.7の地震が発生したと想定。本市の沿岸には地震発生58分後、31cmの津波が到達すると予測されています。この津波による被害は、あくまでも地震で堤防が壊れないことが前提ですが、建物の被害、死者とも若干数と想定しています。しかし、沿岸での津波が低くても、川をさかのぼれば高くなります。市内にある漁港は河口部にあることから、重大な被害をもたらす可能性も否定できません。
シミュレーションでは、津波による重大な被害は予測されていません。しかし、東日本大震災では想定をはるかに超える津波が発生しました。また、身の回りで起こり得る自然災害は、地震と津波だけではありません。私たちが地域は集中豪雨による洪水や台風、高潮などの自然災害に、何度も見舞われていることを忘れてはいけません。

2月10日に開催した第4回福岡県防災会議地震津波部門委員会では、津波のシミュレーションと被害想定が発表された。図は島原半島付近を震源にした場合の津波の最大津波高分布図(部分)。青い折れ線が震源地で、津波の高さを赤色の濃さで表している。

東日本大震災の発生から間もなく1年。
1万6000人近い命が失われ、
今なお3000を超える人の行方が分かっていません。
さらに被災地では大規模な余震が続き、
深刻な原発問題や経済問題もまだまだ解決していません。
その一方で、日ごろから災害に備えおくことの大切さを
呼び覚まさせてくれました。
私たちは震災から得られた教訓を学ぶとともに、
身近に起こり得る災害と向き合い、
想定外を想定内にする努力を怠ってはいけません。

災害と向き合う



基礎の部分を残し津波で破壊された仙台市若林区の民家